



タイトル インフォグラフィックス 気候変動

原 題 D a s K L I M A B U C H

著 者 E s t h e r G o n s t a l l a
(エステル・ゴンスターラ)

訳 者 今泉みね子 (いまいずみ みねこ)

出 版 社 岩波書店

発 売 日 2013年5月28日

ページ数 119頁

著者のエステル・ゴンスターラは、ドイツ・ハンブルグで活動する1985年生まれの本の装丁家、インフォグラフィックス作家である。

インフォグラフィックスとは聞きなれない言葉ですが、情報、データ、知識を視覚的に表現したもので、情報を素早く簡単に表現したい場面で用いられ、標識、地図、報道、技術文書、教育などの形で使われている。また、計算機科学、数学、統計学においても、概念的情報を分かりやすく表現するツールとしてよく用いられる。本書のような科学的情報の可視化にも広く適用されている。

本書の目次を見てみると、

- ・まえがき 6～7頁
- ・世界 8～31頁
- ・ヨーロッパ 32～47頁
- ・アフリカ 48～61頁
- ・アメリカ 62～75頁
- ・アジア 76～95頁
- ・極地方 96～107頁

付録に

- ・行動しよう！ 108～115頁
- ・出典 116～119頁

が挙げられており、1時間もあれば読み終えることができる。

日本では、猛暑、熱中症、ゲリラ豪雨、さらに「今まで経験のない大雨」、といった言葉が毎日のようにメディアに登場しているが、目を海外に転じると、もっと凄まじい気候変動が起きていることを知り驚く。

中国四川省では大洪水が起きており、被災者は 700 万人近いという。ヨーロッパ中部のプラハでは、浸水、インド北部とネパールでも。また、アメリカオクラホマ州では大竜巻が発生し、崩れた建物は 1200 余りと伝えられた。

地球上の気候には国境がないにもかかわらず、我々は、気候変動といえば日本に限定して捉えてしまう。

本書は、現在世界でどんな気候変動が起き、原因から未来予測までを最新のデータに基づいて教えてくれる。

A4 判の大型本で、データ全てを絵と図で示してくれる。しかも、国連や各国の研究機関による報告（付録・出典 116～119 頁）や、被害を受けた国の人々の言葉を大きく取り上げている。それだけ客観性を重んじ、子供でも理解できるように書かれた著者の工夫が見られる。

さて、少し中身を覗いて見よう。

まず、表紙の図は気候リスク・インデックス (21 頁) をそのまま持ってきたもので、1991 年～2010 年の 20 年間に、世界で 14,000 件以上の天候異常のために 71 万人以上が死亡したというデータには驚かされる。

ヨーロッパでは温暖化で鳥の渡りや魚の生息地などの生態が変わり (36～37 頁)、アフリカでは降雨量が減り、水不足と土壌の地力低下から戦争まで起き、事実ソマリアではすでに 100 万人以上が気候難民として土地を離れているという。

南米では、熱帯雨林が脅威にさらされ、エルニーニョ現象が激しくなり、洪水や森林火災など起きている。アジアでは世界第 4 位の内陸湖アラル海が消滅し、モンスーンが変化したインドでは、過剰な雨と雨不足に悩まされている。海面上昇で国土が消える危機にある国も多い (92～93 頁)。

CO₂の各国の排出量の詳細は 12 頁に列記されているが、著者は、気候変動の元凶としてアメリカ (64～65 頁) と中国 (88～89 頁) を挙げ、先進諸国が自国で CO₂排出を制限したとしても、一方で消費者が排出制限のない国 (アメリカも中国もこれに含まれる) から輸入品を買い続けるならば、輸出国側の排出はさらに上昇する可能性が高いとし、そうなれば、温暖化防止のための保護効果は帳消しにされると述べている。

最後に「今すぐに、行動しよう！」とあり、具体的な行動項目を列挙している。森や海の大切さ、節電などの必要性和共に、「地球規模で考えよう！」と訴えている。

アインシュタインは「物事はできるだけ簡潔にせよ。ただし、簡潔すぎないように」と言っているが、気候変動の問題自身は一般の広い層に解説するにはあまりに複雑であるにも関わらず、インフォグラフィックスという媒体を通して、著者は本質的な点に的を絞ることに成功している。

ただ、CO₂犯人説は今夏日本で見られる猛暑については理解できる範囲にあるが、ヨーロッパでのここ数年の冬の厳しい寒さは、地球温暖化のイメージとは合わない。ここは、

地球を一巡する深層海流までの言及が必要なのかも知れない。

本書が、人々の地球の環境意識を高め、資源浪費について考えさせてくれる上で、重要な貢献をしてくれることを期待する。あまりに簡約化されているので詳しいことを知りたい読者には NASA や IPPC の文献（116～119 頁）も用意されている。

また、本書の表現方法は、子供たちの夏休みの宿題の表現方法の一つとして取り上げてみても面白いのではないだろうか。

2013.7.29